

■東京名所繁栄寿語六の解説

明治 29 年（1896）発行の名所雙六である。全体 26 マスの振出しは日本橋で、上りは二重橋だ。サイコロの出目に従って飛廻る形式である。この名所双六の特徴は東京の有力商店の入広告（いりこうこく）で構成されていることである（双六の構成と広告内容は次頁を参照のこと）。さすがに、二重橋に広告はない。

各マスには当時の東京でよく売れていたであろう商品が並んでおり、特に薬の広告が多いのが目立つ。また、現在も繁盛している商品・店（会社）も存在する。例えば、福神漬の酒悦、浅田飴、毒掃丸、伊豆栄の蒲焼などである。

電話番号が記載されているのは、薬種問屋の松澤商店と森田彦四郎（商店）だけである。それも電話本局の局番である。日本で初めて電話が開通したのは明治 23 年（1890）、東京ー横浜間である。当初の電話加入者は、東京が 155、横浜は 42 にすぎず、1 万を突破したのは明治 33 年（1900）である。明治 29 年（1896）当時に電話番号を表示することの直接的な広告効果は少なかったであろうが、社会的なステータスであったことは間違いない。

余談であるが、夏目漱石の『吾輩は猫である』が雑誌『ホトトギス』に連載されたのは明治 38 年（1905）であるが、この中に電話の場面が登場している。以下の文章である。

しばらく佇（たたず）んでしていると廊下を隔てて向うの座敷でベルの音がする。そらあそこにも何か事がある。後（おく）れぬ先に、とその方角へ歩を向ける。

来て見ると女が独（ひと）りで何か大声で話している。……女はしきりに喋舌（しゃべ）っているが相手の声が少しも聞えないのは、噂にきく電話というものであろう。

本双六が発行された 9 年後のことである。

■東京名所繁栄寿語六の構成（マスの配置は実物と若干異なる）

神田神社 浅田飴・堀内伊太郎	二十橋（上り）		京橋 薬種問屋・松澤商店	愛宕山 水仙香・
歌舞伎座 洗粉・梅素亭	芝公園 萬小間物・丸屋支店	明治座 眼薬・岩浪長蔵		丸屋 松五郎
不忍池 福神漬・酒悦本店	日本銀行 薬種問屋・ 森田彦四郎	よし原 おしろい・脇田 盛真堂	萬世橋 売薬（毒掃丸）・ 山崎帝國堂	新橋 古代美術品・ 吉澤商店
九段坂 高等化粧・雨宮		向島 斎藤得方堂	吾妻橋 蒲やき・伊豆栄	日枝神社 薬・安川晃榮堂
	浅草 子宮玉・本家清水 総之輔	永代橋 濃厚葡萄液・ 鈴木謙二郎	富ヶ岡 おしろい/生川霜・小 池	江戸橋 正宗・森本芳兵衛
氷市場 あれしらず/かん 菊・山田晴香堂	洲さき 通経丸・萬珠堂 吉田氏		第一銀行 時計眼鏡・吉沼時計 店	振出 日本橋 せんべい・長谷 川亀樂
鎧橋 お茶・中村茶店	水天宮 シカゴ土産・安藤井筒屋			